

卒業研究

谷田貝ゼミ

「子どもにおきる病気」

3G 19-1208

岡田 瞳

目次

- ・ 3P…はじめに
- ・ 4P…第1章 子どもにおきる病気
「おたふく風邪」について
- ・ 5P…「りんご病」について
- ・ 6P…「はしか」について
- ・ 7P…「プール熱」について
- ・ 8P…「水疱瘡」について
- ・ 9P…第2章 食物アレルギー
- ・ 10P…まとめ

はじめに…

私は卒業研究を「子どもにおきる病気」にしました。なぜ「子どもにおきる病気」にしたのかというと、私自身子どもの時になったさまざまな病気について詳しく知りたい、保育士として現場に立ったとき子どもたちの異変にすぐ気づけるようにしたい、そしてきちんと対応できるようになりたいと思ったからです。

子どもは大人と比べて、まだ体の抵抗力が出来ていません。周りの人の風邪がうつったり、すぐ熱をだしたりします。また、子どもは体調が少し悪いかもしれないと思っても、遊んでしまうなどじっとしていることがあまりできません。なので周りの大人がきちんと子ども一人一人の様子を確かめ気づいていかなければいけないと思います。

子どもにおきる病気として、「おたふく病」や「りんご病」などがあげられますが、どうしておきるのか、どう対処すればいいのかきちんと理解している人は少ないと思います。私もその中の一人です。この卒業研究を通して、子どもの様々な病気について知り理解できるようになりたいです。

また、いくつかの保育園や幼稚園で実習をさせてもらい、「食物アレルギー」の子どもがとても多いことに驚きました。私は食物アレルギーがないので、どんな食べ物でアレルギーになるのか、どんな症状があらわれるのか改めて知るチャンスなので、調べてみることにしました。

第1章 子どものおきる病気

「おたふく風邪」について…

(症状)

おたふく風邪は、感染症の病気です。「流行性耳下腺炎」とも呼ばれています。おたふく風邪の原因となるものが(ムンプスウイルス)です。ムンプスウイルスは、感染した人がくしゃみや咳をする事によって起こる飛沫感染や接触感染によって次々二次感染を起こします。

2歳から12歳までの子どもが感染するケースが多く見られています。以前は、おたふく風邪に対応した新三種混合ワクチンの予防接種が義務づけられていました。しかし副作用として無菌性髄膜炎を引き起こす恐れがあります。なので、集団接種は行われていません。ムンプスウイルスは、2週間程度の潜伏期間を持っているため、感染源の特定が難しいという性質を持っています。

おたふく風邪は、一度なると体の中に抗体ができるので、二度目の発病はほとんどありませんが、抗体を持っていない大人にはおたふく風邪が発症することもあります。

(対処法)

おたふく風邪に対する有効な治療法はありません。自然治療が基本方針となります。おたふく風邪になったら、二次感染を防ぐためにも治るまで学校や幼稚園に通わせないようにしてください。頬や額を氷水などで冷やして上げると辛さが和らぎます。鎮痛剤などで痛みをおさえるのも、方法のひとつです。

もし症状が悪化し肺炎になり、吐き気や嘔吐が起こった場合は直ちに絶食を行い輸液による栄養摂取に切り替える必要があるため病院で診察をきちんとしましょう。

「りんご病」について…

(症状)

りんご病は、「伝染性紅斑」といい、ウイルスへの感染によって発生する病気です。顔の頬や関節周辺の皮膚に赤い発疹が出て、これがりんごのように見えます。りんご病の原因となるのは(ヒトパルボウイルス B19)への感染です。このウイルスは現在確認されている中でも最も小さいという特徴があります。犬や猫に感染するパルボウイルスという種類もありますが、人間に感染するのは(ヒトパルボウイルス B19)だけです。気道からの飛沫感染によって二次感染につながります。

りんご病は、2～3週間ほどの潜伏期間を経て発病し、微熱・くしゃみ・鼻水などがでて風邪に似た初期症状が起こります。二日ほどで発疹が頬や関節周辺に現れ、これを発疹期といいます。一週間ほどで収まり快方に向かいます。発疹期に入ると、出歩いても問題ないとされています。

(対処法)

りんご病の初期症状はとても風邪に似ています。二次感染を防ぐためにも学校や幼稚園等を休ませて、きちんと子どもの様子を見ることが大切です。くしゃみをしているときが一番ウイルスが活発な時期なので注意しましょう。周りの大人が発疹期かどうかきちんとした判断をしましょう。発疹期に移行したならば、外出しても問題ないようです。

りんご病の原因である(ヒトパルボウイルス)のワクチンは、存在していません。しかし、発疹の痒み(かゆみ)を抑えるための鎮痛剤の処方がおもに行われています。

「はしか」について…

(症状)

はしかは、「麻疹」とも呼ばれています。伝染病で大人にも感染する病気です。はしかは、(麻疹ウイルス)によって発症します。麻疹ウイルスはとても強い感染力を持っていて、飛沫・接触・空気感染によって媒介させる性質を持っています。

麻疹ウイルスは感染して10日前後の潜伏期間を得ては発症し、「カルタ期」と呼ばれる発熱や咳を伴い初期症状に移行します。麻疹ウイルスは、咳で飛散しやすいカルタ期に最も強い感染力を示します。3日程度でカルタ期を得て、「発疹期」になります。そこで、全身に発疹が出て来ます。その他にも高熱・くしゃみ・鼻水等の症状がみられます。発疹期に熱がでると最高40°に達することもあります。しかし、三日ほどで回復してきます。高熱が続く場合は二次感染を引き起こしています。

(対処法)

はしかは、安静にしていれば自然に回復してきます。しかし、体の抵抗力が低下していると脳炎などの合併症が発生する可能性があります。ワクチン投与や処方された鎮痛剤・解熱剤等で経過を見ていきましょう。

またワクチンから得た麻疹ウイルスの抗体は、野生株の麻疹ウイルスへの感染や二度目のワクチン接種を受けないと十分に機能しないという性質があるので、油断は出来ません。

「プール熱」について…

(症状)

プール熱は、「咽頭結膜炎」(いんとうけつまくえん)とも呼ばれています。目や喉に症状があらわれ、プール熱は再感染する可能性が高い感染症であるためきちんと注意しなければいけません。

プール熱の原因は(アデノウイルス)への感染です。アデノウイルスだけでも49種類が確認されています。そのなかで3型・4型・7型がプール熱の原因となります。主に接触感染でなることが多いですが、便や飛沫との接触でも感染します。(アデノウイルス7型)は、重症肺炎や心肺不全・免疫機能の低下を合併症として引き起こすことがあります。

全身が水につかるプールは(アデノウイルス)を溶媒し感染源となります。そのため、「プール熱」という名前の由来となったようです。

プール熱は約一週間程度の潜伏期間を得て、喉の腫れや結膜炎、高熱等を引き起こします。喉の腫れが扁桃腺炎(へんとうせんえん)になることもあります。発熱を起こしてから一週間ほどで快方に向かっていきます。しかし、症状が治まっても体内で2,3日はウイルスが活動しているので完治から2日は登校を避けましょう。

(対処法)

熱が下がるまで、安静にしていましよう。発熱による発汗があるので十分に水分補給をしましよう。しかし、喉の腫れなどによる痛みで物が飲み込めないときは、病院で診察をうけ、診断に従った治療をしましよう。発熱が長引いた時には、7型の感染を疑い、きちんと病院で診察してください。

プール熱は、子どもだけではなく大人にも感染する病気です。小学生のときなど、プールの授業が終わった後には、手洗い・うがい・洗眼をしていませんか?それは、プール熱の予防にとっても効果的です。特に手を洗うときは石鹸を使うとより効果的で、プールの中ではゴーグルをして目を守りましよう。

「水疱瘡」について…

(症状)

水疱瘡は、「水痘」とも呼ばれています。感染症で、免疫がちゃんと出来ていない子どもがかかりやすいです。皮膚に症状が現れるとても感染力が高い病気です。

水疱瘡の原因は、水痘・帯状疱疹ウイルスとも呼ばれる「ヒトヘルペスウイルス」への感染です。接触・飛沫・空気感染によって感染し、多くの場合二次感染が原因です。水痘・帯状疱疹ウイルスは非常に感染力が強く、感染者と接触していなくても、皮膚や気道から感染することがあります。一度なると再発することはありません。大人になってから水疱瘡にかかると、400人に1人の割合で肺感染症を引き起こします。また、子どものときに水疱瘡にかかっても水痘・帯状疱疹ウイルスが潜伏を続けます。ストレス・病気になったときなど体の抵抗力が落ちると水痘・帯状疱疹ウイルスが再活動して帯状疱疹となります。

10日～3週間の潜伏期間を経て発症します。食欲不振や倦怠感を伴って赤い発疹がポツポツ3日ほどかけて現れます。ポツポツはやがて水ぶくれになり膿(のう)が溜まったあと、一週間ほどで瘡蓋(かさぶた)になっていきます。医学では水ぶくれから瘡蓋に変わった時点で完治と見えています。

水疱瘡は、途中でつぶしてしまうとクレーターに後が残ってしまうので、充分注意しましょう。

(対処法)

水疱瘡は、抗ウイルス剤や痒み止めの投与を行って水ぶくれを掻かないようにします。水ぶくれはつぶしたらクレーター状に跡が残り、瘡蓋を無理に剥がしてしまうと跡が残ります。跡を綺麗な状態に戻すためには手術が必要であり、保険外治療となります。口の中に発疹が出来たときには、柔らかい食べ物にするなど工夫をしましょう。

水痘ワクチンの接種は、月齢12ヶ月以上からとなっています。ワクチンの接種は早いうちに済ませておきましょう。

「食物アレルギー」について…

食物アレルギーになると、アレルギー反応により口唇、口腔粘膜の接触皮膚炎様の症状から気管支喘息、胃腸障害などを引き起こすものまであります。時には血液低下、顔面蒼白、呼吸困難、意識混濁など生命にかかわる急激な全身の反応、(アナフィラキシーショック) を起こします。

原因となる食べ物には、こんな食物があるでしょうか？

・卵 ・牛乳 ・大豆 ・小麦 ・米 は、五大食物アレルゲンと呼ばれています。

そのほかに、そば、魚介類、柑橘類などの果物、ナッツ類、などがあります。

特にそばとピーナツはアナフィラキシーショックを起こすことがあります。

卵や牛乳の成分から作られている薬剤(塩化リゾチーム・タンナルビン・乳酸菌製剤・一部の抗生物質)もアレルギーを起こしやすい。

食物アレルギーの原因食品は、鶏卵 29%、乳製品 23%、小麦 10%、その後そばや、魚類などがでてきます。

食物アレルギーの原因の一つに、完全離乳前に食べ物を食べさせることが考えられています。乳児は胃腸の機能が未完成なので栄養を取るために主に母乳や粉ミルクを主食としています。未完成の胃腸は、母乳や粉ミルク以外の食べ物を全て異物と判断してしまうのです。離乳を親の勝手な判断で行うことで食物アレルギーを発生させる原因になるのです。食物アレルギーは体質の変化によって発症したりよくなったりします。その反対に、大人になってから、好きな食べ物がアレルゲンとなり、食物アレルギーになってしまうこともあるのです。

食物アレルギーというと、口にいったからなるとも限りません。食べるだけでなく「接触」触れるだけで起きることもあります。現代、食品を手にするとき細かく原材料などが表示されています。そのおかげで、少しでも安心して食べることができ、食べる楽しさを感じる事が出来るのではないのでしょうか。しかし、外食などで思わぬ形で含まれていることがあります。親や学校の給食など、周りの大人がきちんと協力をしていきことが大切になってきます。

まとめ

今回、卒業研究を通して、自分が知っておきたいと思っていたことを少しでも知り理解することができました。子どもに起きる病気は、今回の卒業研究に書いたものだけではありません。まだ数え切れないほどの子どもにおきる病気があります。なので、自分自身で他にどんな病気があるのかきちんと調べてみようと思います。

今回書きたいいくつかの病気についてですが、さまざまなウイルスによっての感染が多いと感じました。飛沫感染・空気感染・接触感染などで二次感染につながるケースがたくさんあるので、周囲の大人の人たちが子どもの小さな異変を見逃さないようにし、正しい知識を持ち、きちんと対処することが大事です。手洗いうがいは、予防するうえで一番効果があるとおもいます。また、マスクをきちんと付け「誰にも移さない・誰からも移されない」ことを心がけていくべきだと思います。

おたふく風邪、りんご病・はしかなどは、無理をせず自然に治まるのを待つことが基本方針です。子どもを持つ親は、子どものおこる様々な病気の知識をきちんと知っておくべきです。そうすれば、慌てることはなく、スムーズな対処ができ、安心して見守っていくことが出来るからです。

食物アレルギーは、何度も耳にしたことがある言葉ですが、どんな症状が起きるのか詳しいことは分かっていませんでした。自習先の子どもの中に食物アレルギーの子が何人もいたので、保育士として現場に立つ前に、どんな食べ物で食物アレルギーを引き起こしてしまうのか知っておきたいと思いました。子どもの時にだけ起きたり、大人になってから今まで大丈夫だった食べ物がアレルギーを引き起こしてしまったりするケースが分かりました。

今回、卒業研究を通して知った知識は、これからちゃんと役に立つと思います。そして、まだ知らない子どもにおこる病気を調べ、より知識を身につけていきたいです。

(参考文献)

- <http://www.kodomo10.org/>
- <http://homepage2.nifty.com/fwqx2334/link23.htm>